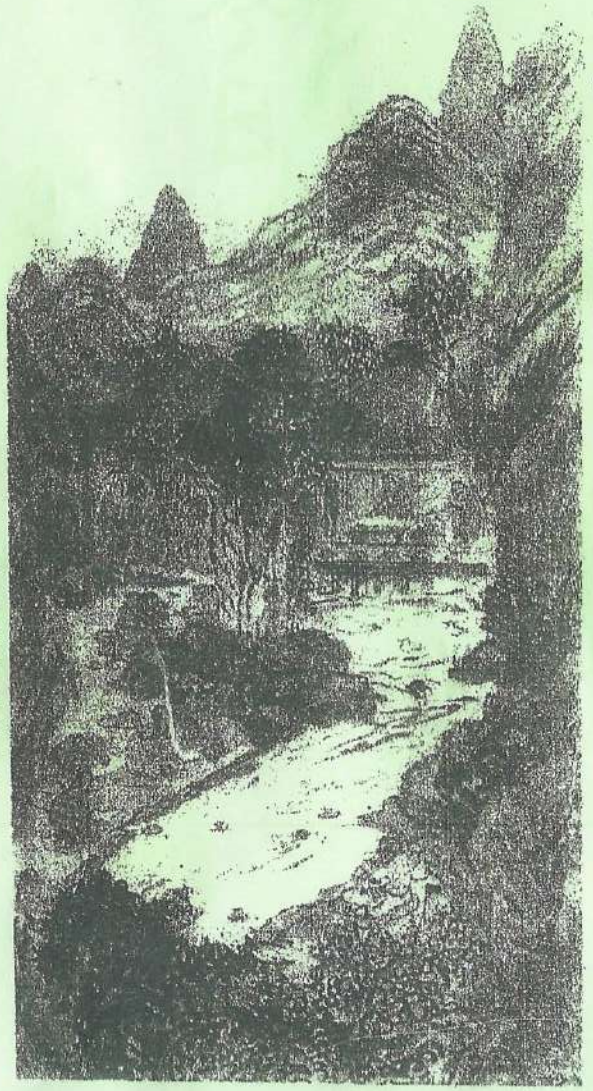
湧水

平成二十六年一月発行（年二回発行）
『湧水』　通巻　第四号



千代田岳精会
自作自詠俳句研修会

淡々と
冬日は波を
渡りけり

稲畑汀子

『私と俳句』

自作自詠俳句研修会運営担当　本多桜子

此れまでの私にとって俳句とは五・七・五の一七音に、季題を読み込む短い詩であり、江戸時代前期に松尾芭蕉、中期に加賀千代と言う著名な俳人がいたという認識しか持ち合わせていませんでした。勧められるままに自作自詠俳句研修会に何の心得も無いまま入会させて頂き、当初は戸惑うばかりでした。回を重ねて往く中にいつしか戸惑いや焦りが無くなって、少しずつでも心の中にゆとりが出来て来たような気がします。

今この情景をどう表現しようかと俳人の気分になるときもあります。私たちの国には四季があります。絆があり季題に恵まれています。

リーダーが、俳句は自分自身を表現できることが一番の魅力だと言っておられますが、私もまさにその通りだと思います。見たまま、感じたまま、聞いたままを素直に取り込んで、顧問やリーダーからアドバイスを頂きそして推敲、なんと言っても句会では、会員の方々と和気藹々の中に自作の俳句を披露して皆さんから感想をいただきしかも自作の俳句を詠じさせて頂ける

事はなんと素晴らしいことでしょうか。年二回発行される『湧水』に、会員自作の各六句が記載されます。少しずつでも進歩の跡が見られれば幸いです。

「ひと手間かけて私流」の句作に努力を重ねてゆき、吟友の輪を広げてゆきたいと思っております。

講師出句

池田笑子（若葉同人）

青梅雨や魁夷見し池霧に亡し

白粉花に母の佐きゐるしむかしかな

少年がお君好演村歌舞伎

屏風絵の芒野の風聴けばある

枯露柿と呼ぶ里人のこころはも

「白雪」とふ馬のしづかや雪催

『目次・会員』（アイウエオ順）

俳号	氏名	頁	俳号	氏名	頁
烏城	磯田貞二	一	千舟	橋本隆一	十二
泰俊	岩崎泰俊	二十二	玄猷	八田豊	十三
ひさ	稲垣ひさ	二	壽	藤原壽子	十四
てるお	鵜飼輝夫	三	桜子	本多敦子	十五
童人	川口榮三	四	をさむ	細川修	十六
朝香	河合節子	五	道人	前田道紀	十七
明鐘	菊地利廣	六	いくよ	三須以久代	十八
合風	久保合介	七	のぼる	耳塚昇	十九
智子	小林智子	八	まい	宮野信子	二十
陵人	鈴木重成	九	得自楼	湯山徳次郎	二十一
順治	徳本順治	十			
たかお	名倉隆雄	十一			

『童唄』

磯田烏城（貞　二）

童唄夫婦善哉百日紅

物見塚旧居なる丘彼岸花

独り見る十六夜の月君憶ふ

着せ藁の裡に一輪寒牡丹

吟友ありぬ追憶尽きぬ去年今年

死者老けず生者の老ゆる彼岸花

『運動会』

稲垣ひさ（ひ　さ）

運動会孫の応援声掠れ

縁側に句作のあくび神無月

境内の鳩わびしきや神無月

故郷へ続くこの空星月夜

爽やかな歓声届く滑り台

路地奥の草むらにぎはし秋の夜

『うみのそこ』

鵜飼てるお（輝　夫）

うみのそこさぞかしすずしかろうかな

孫送り駅までの道夜の秋

真夜中のラジオの時報夜の秋

願ひ事しるす短冊星祭

暁天の白馬集落蕎麦の花

賑やかな彼奴も逝きけり処暑の晩

『吐く息も』

川口童人（榮　三）

七分袖気付かぬままに夏来たる

山小屋へまわり道して春燈

街の灯の仄かについて夜の秋

吐く息も薄くなりゆき春動く

子ははやる親湧きたちて運動会

脚ばてて椅子独り占め秋来る

『五時の鐘』

河合朝香（節　子）

短日や庭師あせらず煙草吸う

五時の鐘遠く響けば暮れはやし

不忍池に古き杭あり赤とんぼ

青柿にふれてさよなら居を移す

山茶花や一句とじめし箸袋

割箸を音立てゝ割る冷奴

『神無月』

菊地明鐘（利　廣）

ビル陰に風の道あり今朝の秋

秋うらら五輪ネオンのスカイツリー

運動会一村総出のにぎやかさ

皎皎と中秋の月夜景静か

神無月ならはしのごと参拝す

神無月台風来たり詩吟休講

『時雨月』

久保合風（合介）

孫の文読み返す妻夜の秋

爽やかに千鳥が淵の朝散歩

秋立つや川面賑わす浮子いくつ

ふるさとを語り酒酌む月の友

子なき女窓固く閉む運動会

空昏し遠く灯りの時雨月

『紅葉』

小林智子（智　子）

早朝のもみじかつ散る無残なり

手折りたる葉よりこぼれし露の玉

目路のはてまでも稲架ある旅の里

地虫なく夜の静寂のひとり言

地より湧く冬の水面にもやたてり

冬の川添いて佇む老夫婦

『閃光』

鈴木陵人（重　成）

空よりの閃光青く夜の秋

梅雨深む傘の彩競いけり

雲の刷毛薄く流れて秋立ちぬ

ノーモア強き陽射しや原爆忌

ペタル踏む幼き笑顔秋麗

剪りそろひ風待つや老いの樹々

『緑陰』

徳本順治（順　治）

緑陰に白球進いて一休み
故郷を離れてもなほ阿波踊り
風呂上り甚平姿に夜の秋
爽やかに吹く風ありて老い二人
運動会ただ見るだけの齢かな
祭過ぎ賑わい消えて神無月

『喉しぼり』

名倉隆雄（隆　雄）

食われてもキャベツしっかり巻にけり
カリフラワー景中で白く太りけり
喉しぼり吟ずる声に虫の和す
吟終えて輩集い茄子うまし
手づくりの旨味しっとり芋ようかん
ショパン聞き遼太郎読む温い床

『漁火』

橋本千舟（隆　一）

あじさゐの藍のきはまる一花かな

園庭の橋に筵や梅雨じめり

漁火のまたたく沖や夜の秋

立秋の午鍾の届く岬かな

爽やかに鐘の音ひびく蔵の街

開放の東照宮や神無月

『国托す』

八田玄猷（　豊　）

音もなく銀杏散り敷くお濠端

秋空や吾が来し道に悔いなきか

紅葉持つ幼児の手に国托す

真夏日に陽炎のごと弟逝く

何事も全力疾走年暮れぬ

枝たわわとどかぬ柿に初時雨

『叛逆』

藤原　壽（壽　子）

生きてこそ働く汗や髪洗ふ
秋淋し八方美人といふ仮面
叛逆のひと粒となる敬老日
まだ紅き血潮流れし乱れ萩
マドンナは永遠に母なり冬の薔薇
歳晩の号外に手を伸ばしけり

『静寂』

本多桜子（敦　子）

静寂の中に飛びかふ夏燕
アベマリア聴きつつ過ごす秋の夜
白雲のたなびく空や秋うらら
歓声に心の弾む運動会
つれづれに想いを辿る夜の秋
バイロンの詩に浸りつつ秋惜しむ

『襖』

細川をさむ（　修　）

詩を吟じ浮世を忘れ夜の秋

庭を見て秋立つころに旅立ちぬ

昼下がり読経にまじる蝉の声

運動会びり走る子に母の檄

湯につかり詩の一吟や神無月

襖絵や千年添ひし夫婦鶴

『暮の秋』

前田道人（道　紀）

境内にベースボールや神の留守

天馬ゆく地球を蹴って運動会

探せども残りものすらなき夜なべ

なえし身の追いかけられて暮の秋

ベランダの盆栽にある紅葉狩

俳論にひと息のあり温め酒

『烏山椒』

三須いくよ（以久代）

神無月人のこひしきうす寒さ

廃校となりて秋桜乱れをり

ざりがにを採る子に遥か雲の峰

紅葉あと五日ほどかと告ぐる鳥

北風に烏山椒揺れ止まず

北風や夕陽の染し武甲山

『野鼠』

耳塚のぼる（昇）

畦に立つ孤高の鷺や青田風

広がりて紅のさつきの妹背山

鋤き終えて見上げる空や秋うらら

運動会バトン待つ子の武者ぶるい

野鼠の噛みあともあり芋を掘る

北風や下校の児等は小走りに

『夜の秋』

宮野まい（信　子）

ほの明かり葉に落つる雨夜の秋
賑やかさ一人帰りし夜の秋
子供らと金魚をすくふ露店かな
運動会ハードルを飛び初一位
運動会リズムに合わせ躍る孫
鈴ならし手合わせども神無月

『故郷よりの』

湯山得自楼（徳次郎）

故郷よりの宅急便の鯉かな
秋立つや越帯気圧衰へず
爽やかに趣味の友待つ通い道
体育の日東京五輪誘致湧く
レイテ島被害惨烈台風禍
年忘吟楽の友吟納め

選六句

岩崎泰俊（泰俊）

空といふ大ふところに秋の雲　朝日新聞

秋風の色に澄みゆく山河かな　NHK

林檎捥ぐ空の青さも籠に入れ　〃

はなみずも野薔薇のごとく光りけり　〃

風呂に入り肩まで冬を沈めけり　〃

木枯しが骨を鳴らして過ぎにけり　〃

あとがき

藤原　壽

『湧水』も第四号となる。日記代わりに作っている俳句を自分で吟ずる事は初めての経験である。

この素晴らしい企画を立案し実践された諸先生方に感謝申し上げますとともに参加できる喜びを感じています。

研修会、吟行会もあり、季節のこと、身近なこと、俳句は気軽に自己表現ができます。是非一緒に楽しみましょう！

自作自詠（俳句）研修会の行事等

（一）例　会＝原則として毎月第二火曜日午後二時から二時間

基礎研修・自作自詠・句評

外部講師の指導

（二）行　事＝吟行会・新年会・納会・特別研修・その他

（三）句誌の発行＝句誌の発行は年二回（原則として一月と七月）

『俳句を作って詠って楽しみましょう！』

自作自詠俳句研修会へのご入会をお待ち致します

『自作自詠俳句研修会役員』

参与	運営委員
鈴木陵人　菊地明鍾	顧問　前田道人
磯田烏城　徳本順治	顧問　湯山得自楼
岩崎泰俊　池田蓮花	リーダー　橋本千舟
耳塚のぼる　八田玄猷	運営担当　本多桜子
藤原　壽	運営担当　鵜飼てるを
小林智子	運営担当　久保合風
	企画担当　細川をさむ
	編集担当　川口童人